
蒼穹の竜騎士《ドラグナイト》

紗夢猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼穹の竜騎士ドラグナイト

【Zコード】

Z6072Y

【作者名】

紗夢猫

【あらすじ】

農村生まれの平凡な少年は、ある日を境に大きな時代の流れへと巻き込まれていく。出会い、別れを繰り返し、その先に待つものは、平穀か、それとも… 初投稿作品です。誤字、脱字等お見苦しい部分を多く含むかもしませんが、なまあつたかい目で見守ってくれると嬉しいです。

* 11/27*20000PV、ニークアクセス3000お気に入り登録150件突破しました!これからもよろしくお願いします!

プロローグ（前書き）

この作品はあくまで架空であり、作品中にある都市、人名等は一切現実とは関係無いのでそのコトを忘れずに。

プロローグ

静寂。

風で揺れる木の葉の音と、時折聞こえる虫の声以外は何も聞こえない。

自分の鼓動だけがやけに大きく聞こえてつるさく感じる。

普段ならなんとも思わないその音も、かすかな音しかしないこの森の中では、十分すぎる程大きな音に聞こえてくる。そう、感づかれんじやないかと心配になる程に。

この場所で待つて2刻程。じつと身を潜め続けるのもそろそろ限界かもしれない。

”ここにはいないか？移動するべきか…”

そう考えた矢先、森の奥からガサリ…と音が。

「ヴフツ…フツフツ…」

音がした方をみるとそこには、1リルム（1m80cm）程もあるうかという巨大な体躯を持った生き物がいた。

ボア…四本の脚で歩き、顔には3リム（約54cm）程もある角を持つたその生き物は、この森の中では一際大きな体躯を持つ、この森の主と言つてもいい存在だった。

ボアは周囲を伺いながらゆっくりと田の前を横切り、この先にある水場へと歩いていく。

呼吸を抑え、ゆっくりと手にした弓に矢をつがえ、キリキリ…と限界まで引き絞つていく。このサイズでは、きつちりと急所となる首の付け根へと撃ち込まねば1撃では落とせない。ゆっくりと慎重に狙いを定め、その時を待つ。

ボアが目の前を通り過ぎた瞬間

ヴュンツ

風を切りながら飛んだ矢は、狙い通りに首筋に…

しかし、撃ち出す瞬間の殺氣を捉えたのか、駆け出そうとしたボア。辛うじて外れず、後脚の付け根に刺さった矢の痛みに鳴き声をあげ、それでも倒れずにこちらを睨みつけてくる。

” チッ… それなら… ッ ”

勢いよく茂みから飛び出た俺は、牽制に矢をもう一本放つと、腰からダガーを抜き放つ。

狙いは変わらず首筋。そこに刃を立てるべく、猛然と駆け出した。

プロローグ（後書き）

コシコシと更新していくつもりでいます。
感想等お待ちしております。

「くそ……重い……つ」

先程狩った獲物をなんとか背負いなんとかかんとか村の入り口まで辿り着いた俺は、背負っていたボアの体を地面上に置くと、その場でしゃがみ込む。

いくら血を抜いたとは言え、この大きさだ。しかも全身筋肉の塊と言つてもいい。並の大人より重いかもしない。いや、重いだろう。それをここまで背負つて歩いてきたのだ。少し休まないと何もできないかもしねり。

そんな事を考えていると、そこそこから村の住人が顔を出し始めた。

「おうカイト、今日はまたえらくデカい獲物を獲つてきたなあ！」

そう言いながら、よくやつたとでもいいたげに肩をポンポンと叩かれる。

「たまたま運がよかつただけだよ。後で捌くから取りにきて」

「いつも悪いなあ。この村で狩りができるのは、もつお前しかいな

いから」

「気にしないで。ベルクさんはいつもお世話になってるし」

そう。この人にはとても世話になつていて。父親を亡くしてから女手一つで育ててくれた母をずっと支えてくれていた、父親のような人だ。村の人達が戦争にかりだされてからも、ずっとこの村を守り続けてくれている。

「悪いなあ。俺も、こんな体じゃなければ……」

そういうつて自分の左半身を見るベルク。

そう、なぜ大人達が戦争に行つてているのに、彼だけがこの村にとどまっているのか。いや、『どどまれているのか』と言つた方が正しいか。

彼は、隻腕だつた。

身体中にいくつもの傷を負つてゐる彼は、元冒険者だといつ彼は、自分が幼い頃に村の側で行き倒れていたらしい。それを村の皆が助け、介抱する事で、なんとか一命をとりとめたらしい。しかし、その事で片腕をなくした彼は、この村に留まり、村に恩を返すと言つて様々な事に手を貸してくれていた…らしい。

全ては村の人達に聞いた話だが。

そんな風に話をしていると、

村の奥から一人の少女が、両手にいっぴいの道具を抱えながら走つてきた。

「兄さん…どこまで行つてたのよ！帰りが遅いから心配…つて…またこんな大きな獲物を…」

「ただいま、リース。道具持つてきてくれたんだな、ありがとう。」「あ…うん。はい、コレ」

そう言つて解体道具を渡してきたのは、妹のリース。

小言が多いのが難点だが、なかなか可愛い部類に入る女の子…だとおもう。見た目は。ただ、どうにも気が強く、村の男の子達には若干嫌われているような気さえする。

だから兄さんは…とか、いつもいつも…とか小言を言わながら、獲物を解体する俺。

…この子の旦那は大変だな…

とか他人事のように考えつつ、手際良く肉を切り出していく。

皮はなめして防具用に…このサイズなら皆に十分行き渡るかな…などと考えていると、

「聞いてるの兄さん！？」

「はい、はい、聞いてるよリース。」

危ない、もう少しで拳が飛んでくる所だつた。
あれは痛いんだ…

「だから、もう無茶はしないでよね！？んじゃ、私は先に家に帰つてご飯の支度してゐるからね？」

そう言つて来た道を戻つていぐリース。

「あ…と思わず溜息をついていると、

「相変わらずだな。愛されてるじゃないか」

「ヤニヤしながらこっちを見てくる男。

「つるせえよトリス。ほら、お前の分」

ひょいと肉を投げ渡すと、

おお危ない！と言いつつそれを軽々と受け取るトリス。

「あぶねえなあ、貴重な肉を…」

「お前が余計な事言つてるからだ。さつさと持つて帰つて、妹に食わしてやれ。うちのみみたいに頑丈じゃ無いんだから」

そう。トリスには病弱な妹がいる。

トリスの所は両親共に亡くなっているから、トリスしか働くものはいないのだ。

へへっ、いつもありがとなつ！と、家へと帰つていく。

その後ろ姿を見ながら、あいつが妹もらつてくれたらなあ…とか…いかんいかん、なんか考えが親父化している。

気を取り直して解体を再開する俺だった。

平穏な日々（後書き）

ボアはイノシシのおしゃべりを考へてもひつとわかつますことを
います

暴虐の果てに

その日俺は、溜まつていた皮や牙等を近場の街に売りに出していた。牙や皮だけじゃなく、村で採れた野菜や果物なんかも一緒だ。週に一度、こうやって街に出て、売ったお金で消耗品を買い揃えて戻る。どうしても、採れたものだけじゃ生活はできないから。

売れ残りや買った消耗品を馬車に載せ村に帰っていると、街道の向こうから、旅人らしき人影が必死に走って向かって来ていた。

「どうしたんだい？ そんなに急いで」

「と… 盗賊が…」

「盗賊！？」

戦争が起こつてから、街や村では男が駆り出される。

そうして駆り出された男手の無い場所に、軍からの脱走兵や敗残兵が盗賊となつて押し寄せる。今迄は戦場も遠く離れていたから比較的安全な場所だつたのだが…

「お前も、早く逃げた方がいい。これだけ荷物を抱えていたら、きっと見逃しては「ダメだ！」この先に、俺の村があるんだ！」…そこは…もうダメだらう…俺が盗賊を見かけたのは、1刻も前の話だ…きつと…」

唇を噛み締め、それでも諦めないと馬にムチをくれる。

「おじさんは街の人達にその事を伝えてくれ！俺はいく！」

脳裏にいろんな顔が浮かんでは消えていく。

リース… 母さん… ベルク… トリス…

俺がいった所で何ができるかはわからない。それでも、見捨てる事はできなかつた。

半刻ほど走らせると、ようやく村が見えてきた。しかし、村の至る所から煙が上がっている。

涙がこぼれそうになるのを必死で抑え馬車を走らせていると、村か

ら何人かの人影が走り出てきた。

あの人影は…

「リース…！」

「…ツ…お兄ちゃん…！」

馬車を止め、話を聞こうとする…が、

「あつちにいるぞお…！」

「く…ツ…皆はこの馬車で街にいけ！おれが食い止める…」

「無茶だ！一人でなんて…「トリス！妹達を死なせる気が…？」…
でも…」

馬車から飛び降り弓に矢をつがえる俺に、なお渋るトリス。

「大丈夫だ、少しの間脚を止めたらおれもすぐに逃げる。森の中に
はいれば俺なら逃げられる！早く行け！」

そう言つと馬に問答無用でムチをくれ走り出させる。
もう猶予はない。

「カイト！絶対！絶対死ぬんじゃねえぞ…！」

…わかってる…こんな所で俺は死ねない！死んでやるものか！

馬車を追おうとする盗賊に矢を放ち牽制しながら、

必死に脱出手段を考えるカイトだった。

「うう……ぐつ……」

ここはどこだ…？

ガタゴトと揺れる振動が身体に響く。何処かに移動しているのはわかるが、自分がいつ、どうやってこの場所に来たかがわからない。

身体を起こそうとした所で身体の至る所に激痛がはしつた。

「うあああああつ…！」

「ダメよ！まだ寝てなきや…！」

そう言って誰かが俺の身体を抑える。

誰だ…？いや、ここはどこなんだ…？

意識が徐々に覚醒するに連れて激しい痛みと疑問が浮かんでくる。

俺は確か、村を襲う盗賊から妹達を守ろうと…つ…？

そうだ、妹は…？

盗賊はどうなつた…？

再び身体を起こさうとするが、身体を襲う激痛のせいで思つよつて動かせない。

「ああ…が…うう…ぐうう…！」

誰か、誰かあの人達を呼んで来て…！

ぼやける意識の片隅でそんな声を聞きながら、カイトの意識は再び闇に閉ざされていった…。

「ふむ…意識を取り戻したか。なかなか頑丈な奴だ。」

道端にボロボロになつて倒れているのを見た時は、もう死んでいるかと思ったが…なかなか悪運が強いらしい。

しかし…この小僧がアレをやつたというのだろうか…？

あの時の事を思い出して彼…ディルケンは寒気を覚えた。

街道を西に進んでいた彼は、街道沿いに横たわる幾つもの死体を横目に黙々と馬車を進めていた。

「…盗賊か…」

戦場はもつと東。本来であればこんな場所に盗賊が現れる事は滅多にない筈だが、それでも絶対とは言い切れない。

事実、この周囲を取り締まつている騎士の連中に捕まりさえしなければ、戦場に近い場所よりも安全に獲物を捉える事ができるだろつ。巻き添えを食う事もない。

だが、これだけの人数がそろそろやられるものなのだろうか？

戦える大人達は皆戦場へと駆り出されている。

残つた老人や女子供では盗賊に勝てる筈もない。

だからこそ”自分達のような仕事”もこうやって、堂々と街道を進んでいけるようなものなのだから。

ポツポツと転がつていた死体も途切れ、そのまま街道を進んでいた彼は、その先に一人の少年が行き倒れているのが見えた。

全身をボロボロにして、至る所から血が流れ出している。片手には

弦の切れた弓、反対の手には無骨なダガーが握られていた。

「……盜賊……にしては若い……」

そう言えば、街道沿いの死体には何本か矢が刺さつたものがあつたが……

「まさか…」んな子供が…？

いや、あり得ない。いくら盗賊とはいえ、戦場に出たこともあるだらう大の大人が、こんな少年にそうやすやすとやられるだらうか？

だが、現状ではそれしか考えられない。

だろうが……近寄ると、かすかにその少年が身じろぎをしたように見えた。

「…おい、いいに手当をして、馬車に放り込んでおけ」

不思議そつにしてこの手トに指示を出し、再び馬車に乗つて走り出す。

8割..いや、9割がた死んでしまうだろうが、

もしも生き残れたら、いい“商品”になるかもしない。

そう思考する彼の顔には、この商売をしている人間特有の邪悪な笑みが浮かんでいた。

再び目を覚ましたカイトは、大人達に連れていかれ、彼らの長である人物の前で跪かされていた。手と脚は鎖で繋がれており、自由に身動きする事ができない。

「お前、名前は？」

「…盜賊に名乗る名前はない…」

間髪おかず出した答えに一瞬虚を突かれたのか、目の前の男が目を丸くし、次いで大笑いはじめた。

「何がおかしい！？殺すなら早く殺せ！奴隸になどなる気はない！」

男はそれを聞いて、今度はとても…本当に意地悪な、嫌らしい笑みを浮かべてこちらを見た。

「残念だがそれはできないな」

「何故だ！？」

「それはな、俺がその、奴隸商人だからさ。」

曰く

お前は街道沿いに倒れていた

それを捨い

手当をして

看病をしてやつた

あのままならば確実に死んでいただろう

その命を救つてやつたのだから、それをビシジョウが俺の勝手だ

そのあまりの暴論に異議を唱えようとすると、抑えていた大人から殴られた。

お前はもう奴隸なのだと。

その身体に奴隸の証も刻んであると。

そつと改めて見せられたのは、己の右手。

その甲には見慣れぬ刺青が刻んであった。

自分が氣を失っている間に、自分が人である事を辞めさせられていた。

反論しようとするが殴られた。

奴隸が勝手に口を開くな……と。

そして聞かされた。

今いるのは、俺の慣れ親しんだ場所ではなく、そこから10ラギオ（200km）も離れた、大陸の中央部にさしかかる場所だと。これから俺達は、山を越え、100ラギオ（2000km）前にある大陸中央部の国、ウイラスの首都、オフィリスへ向かうのだと。

まさか自分が4日も氣を失っていると思つてもいなかつたカイトは、その日、もう、今迄の日常には帰れぬのだと、そう理解した。

そして、あの無い、未来の無い、旅が始まった。

傷が治る迄は馬車に乗つて。

傷が治つてからは、外で歩かされた。

お前より高く売れる女を馬車に載せるのだと言われて。

たまに村や街に着くと、

奴隸の中の何人かが連れていかれたり、
人数が増えたりもした。

口減らしの為や、身寄りの無い子供が売られて来たんだそうだ。

逆に、買われていった者もいた。

俺の看病をしてくれていた女の子も売られていった。

地方の領主の慰み者になるんだ」と、誰かが言っていた。

そうやって売られていくものは多かった。

男でも、その手の類で売られていく事も何度かあったようだ。

大抵は、力仕事をする為に売られていったようだが……

そうやって、周囲の人間に入れ替わっていくうちに、希望や、そもそもの思考能力すら奪われていったような気がする。

延々と歩かされ、

少し仲良くなつた人間も売られていき、

たまに野宿をする事になった日などは、奴隸の中から何人かの女の子が連れていかれ、相手をさせられた時もあった。

見た目がいいモノは手を出さずに高値で売るが、そうで無いモノはどうせ娼館に売られる。それなら俺たちが教え込んでやる… そう下卑た笑い声を聞いた事もあった。

最初の頃は、

妹や、トリス、ベルク等、村の人達の事を考える事もあった。

同じ奴隸の事を庇つたりする事もあった。

しかし、時が経つに連れ、何度も同じ事が起こるに連れ、感情が麻痺していったのだろうか、なにも思う事がなくなつていった。

ただひたすら、自分はどうにつけのだろうと

自分を買う人間はどうにしているのかと

いつ、この歩くだけの日々が終わるのだろうと

そう考えるだけになつていった

何処とも知れぬ地で

その日、何度目かの街に着いた日、
売られる為にと近くの川で身体を洗わされ、
連れていかれたのは、それまでにはあまり見た事がない、大きな屋
敷だった。

何人もの人間が働き、忙しく行き交うそこは、明らかに裕福な、そ
う、領主の住むような、そんな雰囲気のある場所だった。

お前からはなにも喋るなと言われ……すでに反抗する気もない……連れ
ていかれた場所には、その屋敷の主であるらしき、風格のある男が
待っていた。

「デイルケン、久しぶりだな。お前から訪ねてくる事があるとは
「今日は、面白い商品があつたからな」

若干嫌そうに……奴隸商人が直接来たからだろう……そういった男に、
悪びれもなくそう言つたデイルケンはカイトに目を向けた。

「確かに見た目はそう悪くは無いようだが、別段力がありそうでも
なし、特徴もなさそうだが?」

そう言つた男にデイルケンは笑ながら、

「俺もパツと見は確かにそう感じるがな、これでなかなか、役に立
つようだ。こいつを拾つたのはだいぶ東の農村の近くなんだがな、
どうやらその農村を襲つた盗賊を、結構な人数、弓とダガーで倒し

たらしー」

「...ほー...?」

「値踏みするようにカイトを見るが、鼻で笑うと、

「そんな腕があるよには見えんがな：お前、名前は？」

「...カイト...」

「カイト...お前は、何が得意だ？」

と、問い合わせて来た。

少し考えたカイトは、

「三】を少し...狩りができます...」

「ふむ...それだけか。で?この小僧をいくらで買えと?」

ディルケンはニヤリと笑つと言つた。

「1エルム」

「バカな。たかが子供、それも狩りしかできない子供に1エルムとは...」

「しかし、それだけの価値はあると俺は見た。長年の、勘だ」

「...」

それを聞いて、じつとこちらを見て来る男。

なおも訝しげに見てくる男に、

「今は確かに弓しか使えないかも知れないだろうが、教え込めば使い物になるかも知れんぞ?」

「しかし、1エルムはボリすぎだ。50レルム」

「80」

「……いいだろう。80エルム。ただし、使えなければ一度と貴様の所からは買わんからな」

そう告げた男に、ティルケンはニヤリと笑うと手を差し出した。

こうしてカイトの未来は、また別の人間の手に握られる事となつた。

何處とも知れぬ地で（後書き）

1 エルム = 10 万
1 レルム = 1000 円
80 レルム = 8 万円

他の奴隸の平均が 30 レルム、力のある奴隸や普通の女が 50、見
た目のいい女が 80、特に良いものが 1~1.5 エルム

そう考えると、ディルケンはだいぶ足元見てますね、はい。

「ついて来なさい」

そう言われ連れて来られた場所は、広大な敷地の端にある、大きな森の側に建っていた小屋だった。

意外にも綺麗な見た目の小屋に連れて来られ、何をするのかと戸惑っていたカイトに「入りなさい」と促され、自身もその小屋に入ろうと…扉を開けた、おそらくこの屋敷の使用人らしき人物は、中を見て、眉間に皺を寄せた。

何故動きを止めたか気になつたカイトは、そつと脇から中を覗き込む…と

…き…きたない…

思わず「…うつ…」とうめき声をだす程に、小屋の中は酷く…で済むのだろうか…散らかっていた。

足元には元が何かもわからぬ、辛うじて食べかけの食料か?と見られる“ナニカ”や、新しく何かを作っているのか?よく分からない部品などの欠片や塊、着古された衣服などが積み上がり、文字通り“脚の踏み場も”なかつた。

他にも、何故ここにあるのか分からぬ鍬やら木の棒などが立ち並び、「倉庫か?」とも思いたくなる小屋で、いつたい何をするのだろうと、チラリと件の使用者の様子を伺うと、眉間に深く…本当に深く皺を寄せ…

「片付けます。手伝いなさい。」

抑えきれぬ怒氣を孕んだその声に、カイトは只、頷くしかなかつた。

何をどうすればいいのかわからないカイトに、「アレはこっちに」「それはあっちに」等と支持を飛ばし、部屋を片付け続けていた使人用人“フイリップ”は、やつと片付いてきた小屋内部を眺め、はあ…と溜息をついた。

ここに住む男は、いつ訪ねてもこんな風に部屋を散らかし、その度に自分が掃除をしていた。俺は掃除夫では無いのに…などと考えつつ、今日からこの屋敷に住む事になる奴隸…カイトといったか…を、横目でチラリと伺つた。

主に呼び出され応接間に赴けば、例の“奴隸商人”が持つて来た奴隸を買ったと言われ、ここに連れて来て渡すように命じられた。

別段奴隸を買う程困つてゐる事があるわけでもなし、唐突に買う事になつた奴隸を、どうせあの薄汚い商人にあれこれ言われ買わされたのだろう、そのどうにも平凡な少年を見て、ほんの少しだけ憐憫の表情を向け…しかしそれが仕事なのだと聞かせ、あれこれと支持を出す。

実際、使えない少年では無いようだ。

言つた事には素直に返事をし、どうやら文字も少しは読めるらしい…先程本の整理をしていた…まあ、教え込めば使えるのだろう。し

かし、この小屋の主に果たしてそこ迄の期待ができるだらうか……と
考え、
フィリップはまた少し頭が痛くなつた。

小屋の掃除も一段落し、思わず溜息が出た所で、帰つて来ない小屋の主に業を煮やしたのか、あの使用人が声をかけて来た。

「君、名前は？」

「カイト…といいます」

それまで特に会話らしい会話をしていなかつた為、虚を突かれたカイトは、少し緊張しながら返事をした。

「ふむ…私の名前はフィリップだ。この屋敷で、使用人として働いている。奴隸の管理も私が受け持つていた。君が来る迄はいなかつたがな」

「冗談を交え、ニヤリと笑いながらそう言つた使用人…フィリップを見て、緊張しているのがわかつたのか、気分をほぐそうとしてくれたのか、おかげでカイトはすこし気が楽になった。

「君は運がいい。この屋敷の主、アベル様は、とてもお優しい方だ。他の所と違い、君にも人としての生活はさせてくれるだろう」

優しく微笑みながらそう言われ、ほつと胸をなでおろしたのも束の間「だが…」と続けた彼の目に射竦められ、思わず息を呑む。

「だからと書いて、急けたりなどしたら、当然罰はある。いくら優しくとも、甘やかしはしないだろ。覚えておく様に」

身体に緊張を走らせ、かすれた声で返事をするのと同時、小屋の扉

が開き、一人の男が入って来た。

「おうフイリップ！相変わらず真面目にやつてそうだなあ…で？なんでもうちでこんなガキをいじめてやがんだ？」

そう言って入つて来た男は、簡素なレザーアーマーを着込み、腰にショートソード、背中に『』を背負つた、どう見ても冒険者か狩人にしか見えなかつた。

なんでこんな所に？などと思つていると、

「今日、旦那様が買われた奴隸を連れて來たんですよ。ここに連れて來る様にと言われたので。」

「ほー…見た目はひょろつちそうだが、使えるのか？」

「さあ…少なくともバカではなさそうですが…使えるかどうかはあなた次第でしょ？」

それではこれで…と、小屋を出ていったフイリップを送り出したあと、冒険者のような人がこちらを振り向いた。

「とつあえず…メシだ！腹が減っちゃなんにもできやしねえ、お前も腹が減つてるだろ？こっちにこい！」

引きずられるように連れていかれたカイトは、少しだけ、明日からの生活が不安になつっていた。

「で、お前は何ができるんだ？」

唐突に切り出され、言葉を失うカイト。食事をしている手も止まってしまった。

狩ってきたのだろうか？ラビやホーン等の肉と、ライと呼ばれる植物の種子を煮込んだ物を差し出され、「こんな物しか無いが、好きなだけ食え」と言われたのは四半刻程前。

ここ数ヶ月とは比べられない程良い物を出され、戸惑っていたのも数瞬、鳴った腹の音に顔を赤くし、食り様に食べていた結果、鍋の中はほぼからになっていた。

カイトの食べ様を面白そうに見やり、自身も負けじとかつくりつていたその男…ガゼットといったか…は、落ち着いた所を見計らい、そう切り出していた。

彼としては別段おかしな問いではなかつただろ。むしろ、当たり前の疑問もある。

と、言つても、彼の所に連れてこられたからには、やる事はそがあるわけでもなく、その中の何をさせるかを考える為に聞いた迄だ。

だが、世間一般ではとてもおかしな事でもあった。

奴隸と言えば、言われた事に絶対服従、アレをしろ…と言われれば、有無を言わさずやらされる。当人ができる、できないは関係無いのだ。

この人は、あまり奴隸を扱つた事が無いのだろうか？

などと、奴隸歴数ヶ月のカイトがバカな事を考えつつ、「言われた事ならなんでも…」と、答えたのを聞き、ガゼットは少し困った様な顔をした。

「ん～あ～…お前は、ここで何をやるか聞いたか？」

黙つて首を横にふるカイトを見て、嘆息するガゼット。「あのぼつちゃん…軽い説明くらいしとけよ…」と、一人愚痴ると、改めてカイトを見やつた。

「よし、ならここでの仕事の説明から始めるか。俺はここで、森から出て来るモンスターの退治、それと肉類の食料の調達をしている。お前がここに来たのは、その補佐と言つた所だらう。まあ、今迄俺一人でどうにでもなつていたから、人出が必要つて訳でもないんだがな」

「モンスター…が、出るんですか？」

その言葉に、内心ヒヤリとせられる。

モンスター…人を襲う怪異

と、言つても、全部が全部、人を襲う訳でも無い。

先程食べていたラビやホーン、以前村で狩つていたボア等、草を食べて生きる比較的穏やかな物も多い。

人語を解する物もいる位だ。むしろそちらのほうが多い。

だが、問題は、その少数派になる、人を襲う物たちのほうだ。

人を襲う。それが出来る程の力を持ち、存在する物。それらを総じて“モンスター”と、人は呼んでいた。

つまり、この森には“人を襲うモンスターが出る”という事。

その事を理解し、緊張するカイトを見て、何故かニヤリと笑うガゼット

「成る程、確かに頭は働く様だ。だが、心配しなくていい。もう滅多な事じやこの森からモンスターが出て来る事はない。基本は2日か3日おきに森に入つて、獲物を狩つてくる。後は、裏手の畠の世話やら…後は、薪割り位か」

それを聞いて安心した。そうでないならば、四六時中モンスターの襲来に気をつけていなければいけない。休む間もなく警戒し続けるのは、死ねと言われるも同義だ。

いくら、奴隸になつたからといって、簡単には死にたくない。

「だから…お前が何ができるか聞いたんだ。あしでまといは連れて行きたくないからな」

ほつとしていたカイトにそう告げるガゼット。若干ニヤニヤとした意地悪な笑みを浮かべている様な…

「『』と、ダガーを少し。でも、いいんですか？刃物持たせたりしちゃまずいんじや？」

「お前位のガキが刃物持つた所で、何も怖くはない。素手でも叩きのめせる」

「お前位のガキが刃物持つた所で、何も怖くはない。素手でも叩きのめせる」

「それに、お前の右手の“ソレ”がある限り、ここから出たとしても、何も変わらんぞ」

… そう、奴隸になつた事でつけられた、この右手の“奴隸の証”は、一生生涯奴隸である事を刻む物。

本来首筋等に多くつけられるそれは、主人に解放の証である、別な刺青を彫られる迄、奴隸である事を示される。

もしここを自力で出た所で、別な人間にそれを見られ、捕まれば、また容赦なく奴隸である事を強いられる、魔の鎖。

その事を思い出せさせられ、俯くカイトに、少し言ひすぎたとちょつと申し訳なさげなかおをしたガゼットだったが、気を取り直したようにまた説明を続けた。

「まあ、そうゆうひつた。ダガーは生憎持ち合わせがないから、代わりにショートソードを使え。俺の予備を貸してやる。弓もな。矢は自分で作れ。それから、これから薪割りはお前の仕事な」

狩りは今日はやつて來たから、薪割りと、獲物をいくらか干し肉よ

うにしておいてくれ。

そう言い残し、後は任せたところ寝をはじめたガゼットに、ほんと
に大丈夫なんだろうか、この人は？と、どうにも釈然としない気持
ちで、仕事を始める為に表に出るカイトだった。

それから、矢のように月日が過ぎて行つた。

ガゼットの行つたとおり、モンスターが出る事はなく、数日置きに
入る狩りでも、苦労する事もなく獲物を獲つていつた。

元々狩りをしていた事もあり、ガゼットの力量もあってか、必要が
ない程獲つてしまつた事もある。そんな時は全て干し肉にするか、
街に使用人が売りに行つていたようだが。

畠の方も特に手がかかる事は無く、とつた野菜も自分達が食べるだ
けの物なので、特に気負いなどもなかつた。苦労したのは薪割り位
だらうか。

だがそれも、2年を過ぎた今は、全く区も無く出来るようになり、
毎日の様にやつていたせいか、体つきも一回り…いや、2回り程も
大きくなつていた。

もう子供と言われる事もないだらう。

時折暇を見ては稽古をつけてくれたガゼットのおかげで、ショート
ソードの使い方も少しあはマシになつていた。

そこらの野盗数人位なら、苦もなく圧倒出来る程に。

弓の方もだいぶ腕が上がり、空を飛ぶ鳥も射落とせる様になつてい
た。

これは、もともと不器用だったのだろうか？ガゼットよりも腕が上
がり、彼を苦笑いさせていた。「俺は必要ないんじやないか？」と
いう冗談とともに、毎度の如くサボろうとする言い訳に使う様にな
つていたが…。

しかし、新たな日常になつていたそれらは、とある一人の人物によ
つて、粉々に打ち砕かれる事となる。

とある、一人の“お姫様”によつて…

新しい生活・3（後書き）

まだまだ書く文章量がわからず、部の長さが短くなつてますが、徐々に量をあげていけたらな……などと想っています。

出会いは唐突に

その日もカイトは、ガゼットと共に森の中に入っていた。今日はいつもと違い、出来るだけいい“獲物”を獲るべく、かなり深い所まで潜っていた。

と、いうのも、今日からしばらくの間、ガイラン্ড家へ王城の姫君がお出でになるというのだ。

カイトが飼われているガイラン্ড家の当主、アベル・ガイラン্ড。どうやらこの人は、ただ腕のいい領主…というだけではなく、王城の姫君の世話を任される程に力を持つ存在らしかった。何故それ程の力を持つ存在が地方領主で収まっているか等、謎も多かつたが、ただの奴隸には関係がない話。

自分の仕事は、ただいい肉を狩り、持つて行くだけ。

そう割り切り、弓を手に、森の中を疾駆していた。

今回は普段来ない森の奥という事もあって、普段よりも警戒しつつ、飛ぶ様に森の中を奥へ奥へと走り抜ける。

足場が悪い森も、何年もの間狩人として過ごして来たカイトやガゼットには、少し足場の悪い庭程度にしか感じられず、まるで飛ぶ様に木々の間をすり抜け走る。

時折止まつては気配を探し、手で合図を送つては獲物を追い求めるカイト。

その姿を見やり、「もうお前は人間というより動物と言つた方が正しいかもしけんな」と、苦笑混じりにガゼットが言つていたのは3ヶ

用ほど前だつた。

先行していたカイトは、強烈な気配を感じ、慌てて気配を殺す。

この先に何かいる…

ゆっくりと、慎重に歩を進めたカイトの前に現れたのは、人よりも遙かに大きな巨体を持つ一頭の獣。

今迄に見た事もない、その桁外れの存在感と巨体に息を呑む。じつと気配を殺し見つめていたカイトに、いつのまに近づいたのか、隣に屈んでいたガゼットから「あれは…ガイラルベア…か」と、溜息にも似た声が漏れる。

「あれは、ここにいる魔物の中じゃ頭一つ飛び抜けた力を持つ。そこいらにいるモンスターよりもタチが悪い…」

「…避けますか…？」

その言葉に危機感を抱き、安全策を取ろうとしたカイトに、「いや…」と、いつもの様に意地悪な笑みを浮かべ、

「確かにいつもなら無理に狩る必要も無いが、今回は特別だ。何より、あいつの肉は、美味しい」

そういう事ならと、顔をあげ、狩る為の段取りを考えていく。

あの巨体だ。真っ正面からやりあつても勝ち目は薄い。死角から急所に矢を叩き込むか…等と考えていると、何の気配を感じたのか、

ふつ…と獲物が顔をあげた。

バレたか?と肝を冷やしていると、何処かへと歩み去つていくガイラルベア。

ここで逃すのは勿体無いなど、ガゼットと一人、そつと後を追つていぐ。

気配を殺し一手に別れ、どこ迄いくのかと後を追い続ける事半事。

そろそろ森野はずれじゃないか?と、記憶を頼りに自身の位置を確認していると、唐突に獲物の先から「ひつ…」と言ひ悲鳴の様な物が聞こえて来た。

声が聞こえて来た方に目を凝らすと、森には不似合いなドレスを着た少女が、同じく不似合いな侍女服を着た少女を庇つ様に、腕を広げ、魔物の前に立ちはだかっていた。

これは…まずいだろ!…ッ!

慌てて飛び出よつとするカイトを目で抑え、ガゼットが手で支持を送つてくる。

こいつの注意を俺に向ける。いくらか傷を負わせるから、どじめはお前が刺せ。

了解の合図を手で送り、腰の剣に手を当てていつでも飛び出せるように腰を落とし呼吸を整える。

失敗は許されず、一刻の猶予もない。

焦りにも似たその感情を抑え、待つたのも束の間、ガゼットがいた反対方向から矢を飛んだ！

射られた矢は真っ直ぐに飛び、狙い違わず獲物の脇へ。

一瞬やつたか！？と思つたが、予想以上に皮は厚いらしく、先端が刺さるだけだつたようだ。

突然の攻撃に驚き怒つたガイラルベアは、その矛先をガゼットへと向け、思い切り地を蹴つた！

その勢いは凄まじく、あつという間に距離を詰めていく獲物にカイトは、驚くと同時にしまつた！と慌てて地を蹴る。

しかし、獲物の勢いは凄まじく、あつという間にガゼットへの距離を縮めていく。

間に合わない…ツ！

必死に走るカイトを横目みるみる近づく獲物を前に、ガゼットがチラリとこちらを見て、意味深な笑みを浮かべた。

それと同時に、ブツブツと何事かつぶやいていたと思つたら、突然片手をあげ、まるでガイラルベアを止めるかの様に手のひらを向け、吠えた！

『フレーム！』

すると、掲げた手のひらから唐突に炎の塊が現れ、向かって来たガイラルベアの鼻面に直撃した！

いきなり現れた火球を顔面にぶつけられ、狂ったようにがくガイラルベア。

隙ができた！今しかない！！

瞬時に判断したカイトは、腰の剣を抜き、獲物の腕の下を抜け胴の下へと抜けるやいなや、頭上にある獲物の首筋へと一直線に剣を突き立てた！

しかしそれでも即死しなかつたのか、腕を振り上げカイトへと振り下ろそうとしたその瞬間、カイトの背後にいたガゼットが弓を一閃。飛び出した矢は一直線に額へと突き刺さり、それと同時に力尽きたのか、その巨体を地へと投げ出した。

* * * * *

危なかつた…

初めて遭遇した種類の獲物だつたといつても、危険だつた事には変わらない。ガゼットがいなければ、倒れていたのは自分の方かもしけなかつた。

知らず流れていった冷や汗をぬぐい、それにしても…と後ろを振り返る。

その的確なサポートだけでも凄いのに、さつき見たアレは、確かに…

「魔法…ですか…」

「そういうや初めて見せたか?まあ、使いどころなかつたしなあ

と、とぼけるガゼットの言葉に、はあ…と溜息が漏れる。

魔法。

言つだけなら簡単だが、それを実際に使つのは恐ろしく難しい。

遙か昔は、大地に魔法の源となるマナが満ち溢れてはいたいたらしが、今の時代ではほぼ枯渇し、魔法は己の体内に宿るマナを使う事でしか行使できなかつたはずだ。

それを、まるでちょっと出来のいい手品を使って見せるかの?とくに出し、やうにそれを当たり前の如く言つ。

前から思つていたが、本当にこの人は、得体が知れない…

そんな思いをしつてか知らずか、サクサクと歩を進め、狩つた獲物の血抜きなどをしている様は、どこからどう見ても、むさ苦しいいたの狩人でしかなかつた。

出会いは唐突に（後書き）

ラビ＝野つぞざき

ホーン＝鹿

ガイラルベア＝3m位の巨体を持ったクマ

つて所でしょうか。

熊鍋おいしいよ熊鍋

「そのほうへ！ たいがであった！」

手にした剣についた血油をぬぐい、どうもってこれを持つて帰ろうか等と考えていると、倒れたベアの向こうから、小柄な少女が近づいてくるのが見えた。

「そなたらのゆうし、しかとみどりけた！」

「…」

ちょっと舌足らずな感じで偉そうにしゃべるその子は、きっとその手の類の趣味の人には、とても可愛く思えるんだろうなあ。

そんな感想を抱きつつ、どうするんです？と、ガゼットのほうを見やる。

どうやらガゼットも少し困っているらしく、ちょっと考えた末に声をかけた。

「お嬢ちゃん、ここいらは魔物の数が少ないといつても、お嬢ちゃんの様な可愛い子供が入つて来ていい場所でもない。そっちの子と一緒に、早く帰りな」

「…もうちょうと言つて方を考えられないのだろうか…」

軽く頭を抱えつつ、それでも言いたい事はほほ同じであるカイトは、黙つて経過を見守る事にした。だが結果は様相道理…

「姫様になんて無礼な口を！一介の狩人が、ただ顔を合わせるだけでもありがたいと言うのに！」

「よし、あのものがいっていることもどうりじゃ。たしかにこのような森にかるがるしくはいるべきではなかつた」

「予想外に後ろの、恐らく同じくお嬢様を諫めるであろうと思つていた侍女に抗弁され驚く2人。そしてそれを逆に諫める“お姫様”

「しかし、命をたすけられて、なにもせぬまま立ちさるのも、れいきにもどる。そのほうら、名前はなんともうす？」

「…俺の名はガゼット…」つちはカイトだ

「そのほうらの名前はしかとおぼえた。いざれこたびのれいにまいり。それではな」

そつ言つて森を街道の方に歩いていく。その彼女を追い、不機嫌なまま付いていく侍女。

なんとなしに顔を見合わせ、どうしたもんかなあと考へつつ、とりあえず獲物を持つて帰るのが先決と、どうして運ぶかを考える2人だつた。

バラすと逆に大変だからと、2人でかついで屋敷に戻り、味のいい部位だけを選んで屋敷に持つて行くカイト。

それでも一抱え以上の大きさになり、汗を流しながら厨房に持つていくと、ちょうど中からフイリップが出てくる所だった。

「おや、今日はなかなかいい獲物がとれたようだね」「はい、だいぶ奥の方迄行つていたので」

あれからだいぶ時もたち、その間何度も顔を出してくれていたフイリップとも、だいぶ親しくなつていた。

「今回の獲物はなんだつたんだい?」「ガイラルベアです。端の方はよけてきました」「なるほど…なら夕食が楽しみだな。お姫様もきっと満足するだろう」

普段なかなか出ない食材に満足そうに頷くフイリップ。だが、その言葉にふと、危機感を覚えた。

「お姫様…今日来られるので…?」「ああ、どうやら少し早めに着くらしい。道中で何事かあつたようでな。お陰で大忙しだよ」

そう苦笑いで返したフイリップの言葉も半分ほどしか聞こえていなかつた。

姫様

たしか、あの侍女もそう言つていた。
…変なことにならなければいいが…。

不意に、ぞくりと背筋を悪寒が走ったような気がした。

肉を運び終え、そういえば何故わざわざお姫様がここ迄くるんだろう？なんて事を考えながら屋敷を出ると、丁度正門の所に、きらびやかな馬車が止まるのが目に付いた。

嫌な予感がして、足早に立ち去りつと背を向けた瞬間…

「おおーー！」のおぬし！もしやさきせき森で会つたものではないか！？」

その喋り方と声に、思い当たるのは一人…

恐る恐る振り向いたその先には、この家の当主に迎えられる、一人の小柄な少女がいた。

呼び止められたからには逃げるわけにはいかない。半ば諦めの境地でそちらに向かうと、満面の笑みを浮かべた姫様と、訝しげな顔をしているガイランド家のもの達が待っていた。

「やはりおぬしだったか！まさかこの家のものだったとは…さあほどは助かった！あらためてれいを語りや！」

「失礼ですが姫様……この者と知り合いで……？」

無礼を承知で話に割つてはいる当主。

それもそうだ、自分の家の奴隸が、まさか主君の姫君と知り合いであつた等、笑い話にも出来ない。

「いや……来るとちゅうで馬車からペットがにげだしてな。それをつれもどすために森へ入つたら、巨大なまものにおそわれたのじゃ」

それを聞いて驚くアベル。姫君が「くら」ちらに全く非がないとしても、任されている領地内で怪我でもしたとあらば一大事だ。

「ヤ」へこのものと、もう一人ベアのよつたものがあらわれてな、助けてもらつたのじゃ」「

「なるほど……」それならば納得。というより、家の危機を救われたよつなもので、むしろ家からも何か褒賞を出さねばならない位の事でもあつた。どうしたものかと考えていると、

「して、さきほどはきちんと聞きそびれたが、そなたのほうは何か、ほしいものはないか? わらわにできる事ならなんでもよいぞ」

しかし、そう言われても特に何も出て来ない。そもそも、奴隸が何か望むという事自体がおかしい気がするし、ガゼットの方も「いらねえ」と一蹴しそうな気がする。

結局「私は奴隸ですから、褒美なんてとても……」と、ありきたりの言葉を告げて辞去させて貰おうと口に出すと、逆にその言葉を聞いて彼女の瞳が輝いた。

「まつーおぬしはどういなかー? あれだけのうつでを持ちながらどういとは…もつたいないのう…なりばどうじや、わらわの元に来ぬか?」

その言葉に至つては流石のアベルも黙つていられず、「お待ちください姫様」と、割つてはいる事を余儀なくされた。

流石に姫様でも、いきなり奴隸を持つて帰り、さらにはそれを側に置くなど考えられない。奴隸を所有する事すらあり得ないのだ。

切々と説こうとするアベルだが、なかなか姫は言つ事を聞かない。拳句、

「ふむ、そういえばこのものはそなたの奴隸であつたな。ならば、わらわがこのものをそなたから買えよ。いくらじや? 5エルムか? 10エルムか?」などと言つ始める始末。

びついたらよいか…と頭を抱えていると…

「ありがたいお言葉なのですが、私などが姫様のお側にいても役に立てる事などないでしょ。アベル様にも、とてもよくしていただいている事あります。ですから、もうややのお話はこれで…」

と、カイトが言つた事で姫もようやく折れたのか、「ならばしかたないのう…」などと肩を落とし、心底残念そうに言つた。

「ならば、後日またほうびの話をするとしよう。わらわの名前はアリシア・ローゼスハイトじや。おぬしのなまえはもつおぼえた。ゆえにわらわのなまえ、しかとおぼえておぐのじやぞ?」

そう言い残し、颯爽と屋敷の方へ去つて行つた。それを慌てて追うアベル他一同。そのほぼ全員が鋭い視線をライトに投げて行き、なんとも居心地の悪い思いをする事になった。

その日アリシアは、遅く迄物思いにふけっていた。
あの奴隸の青年…カイトといったか…彼が、どうにも欲しくて堪ら
なかつたのだ。

彼の年齢は17～8といった所だろう。
その年で、ガイラルベアという、大人でも手こぎする相手を軽々と倒
してのけたのだ。

その才能は皇都でもなかなか見れない。

その上頭もしつかりしていようが、今からきちんと鍛え上げれ
ば、近衛になつてもいい所迄いくだらう。

欲しい…

あやつが欲しい…。

等とブツブツ呟きながら部屋を時折立つてはウロウロ歩き回り、ふ
と何かに気がついたように顔を上げた：かと思えば首を降り、また
椅子に座る。

そんな怪しい皇女の姿を、「また始まつた…」とか噂をする女中
達。その上中には、「まさかあの年から男あさりを…」等と、不敬
罪とも取られかねない…むしろそうとしか思えぬ発言をするものも
いた。

だが、当のアリシアはといえば、そんな事など全く気づかず、只々
どうすればカイトを自分の元へ来させるか。それだけしか考えてい
なかつた。

しかし、この事をカイトが知れば、そのあまりの突拍子も無さに額然としていただろう。

彼にしてみれば、あの戦いで手を出したのはただ一度。しかもそれさえとどめを刺せず、あのまま腕が振り下ろされればただでは済まなかつただろう。

そんな戦いが評価されてもびうじょうもない…。

しかし、アリシアからしてみれば、全くの謙遜…となる。

少なくともアリシアが立っていた位置からは、弓を射たガゼットの側へと向かっていたガイラルベアへ、勇猛果敢に飛びかかり、腕をかいぐぐつて喉へ一突き！

ガゼットが魔法を使つた事も、首から剣を生やし、なお襲いかかろうとした所に矢を額に突き立てる…などといった所は全く見えなかつたのだから。

普通は剣を首に突き刺されたら生きてはいられない。
だからベアはあれで死んだのだ。

おまけに、髭の生えたむさくるし男より、顔のそこそこ整つた若いものの方が…といった所でだいぶ美化されてもいたが。

結局のところ問題は、どうやつてカイトを自分に側におく口実を作るか。

色々と頭を捻つた挙句そう結論づけたアリシアは、翌日アベルにこの案をのませるために、あれやこれやと作戦を練るのだった。

翌日アリシアに「カイトの件について話がある」と言われたアベルは、どうしてくれようかと途方に暮れていた。

と、いうのも、今回アリシアがガイランド家に来ている理由は、『社会勉強』という意味合いが強い。

どうしても世襲制の問題点となる、『限られた世界で過ぐすうちに固定される視点』については、その制度からして避けては通れない。

皇族はどうしても狙われやすい。

だからこそ、万全な皇城に住むのであって、決して権力を振りかざすためでも、贅沢をしたいからといつ訳でもない。

だが、そこで常に生活をする内に、どうしても考え方は歪んでしまう。

限られた場所で、限られた人にしか会わぬ生活。

それは歪んでいるとしか言えない。

価値観、考え方は、どうしても会う人間、生活する場所で変わってしまう。

皆が同じ生活をしているのならばそれでもいいのかも知れない。

だが、世界といつもの違つ。

目覚め

あるいは家事を

あるいは仕事を

人々はこなし、それによつて生活していく。

その生活は千差万別。

ひとりとして同じものはない。

だからこそ法は、力無きもののためにあり、
その為に力を振るうのが、皇族たるものに義務である。

しかし、一部の者しか見えぬ場所にいては、如何に賢者と言われようと、その目を曇らせてしまう。
それが幼子ならば尚更に。

そして人は、自分が一度も見た事がないものは、想像すら出来ない。
だからこそ、このローゼスハイト皇国の皇族には、各國にはない、
とある義務が課せられている。

『齡10を数えた皇族は、その領地内にあるいづれかの家に赴き、
1年間生活すべし。その間その者は皇族としてではなく、『1人の
人間』として生活し、街に赴き、己の生活を支える人々の生活をよ
く目に焼き付けるように。そして皇族としての義務を、しかとその
心に刻むべし』

それがローゼスハイト皇族に課せられる義務であり、それをもつて、
晴れて皇族として受け入れられる、ある種の試練でもあつた。

この考えが根幹にあるからこそ、ローゼスハイト皇国は、1000

年の長きに渡り、その国土を維持し、大国としてこの大陸の中央に位置し続ける事が出来たのだ。

そういう意味では、魔物に襲われ命の危険と、その尊さを知るきっかけになり、奴隸という社会の仕組みに触れるきっかけにもなった。それはきっち、彼女の得難い経験の一つになるだろう…とは思つ。思うのだが…。

「奴隸を連れ帰る側に召し置くのは流石に…」[冗談としても笑えんな
…」

“奴隸”といつも存在価値・1（後書き）

社会見学システムは、以前から考えていた、専制君主、及び王権と、民主主義政権との弊害その他を考えた時に、ほんやりと考えていたものを使ってみました。

一応これだけではなく、他にもあれこれと制限などもあるんですけど、それはいつか機会があれば晒そつかな…と。

それのお陰で、ローゼスハイト皇国は、多少のございややら問題はあるものの、他の国に比べれば、しっかりした土台と平和な生活が長く続いている大国であります。

専制君主は、意外と悪い事ばかりでもないのですよ。

アベルは、応接間にあるソファに深く身を沈め、驚きと、喜悦を感じながら、その話を聞いていた。

「だから、わらわは、どれいかいほうの為の手段の一つとして、カイトを側におきたいのじゃ！」

強気に、はつきりと自分の意見を主張する田の前の幼子に、アベルは今はつきりと喜びを感じていたのである。

奴隸解放

その事になにか思い入れがある訳でもない。

カイトが欲しいから

ただその為だけに、彼女は理路整然と、奴隸解放といつ手段を使おうとしたのだ。

それも、そちらへんの大人なら考へもつかないほどに、あちんど、はつきりと“ただし”を全面に主張した、反論の余地が無くなるほどのものとしてまとめ上げたものを…だ。

これほどとは…

以前から聞かされてはいたが、こゝまで賢いなどとは思つてもいなかつた。

思いつきにすぎないにせよ、その思いつきを確かなものとすべく、自分の知識を使い、現実にする手段として作り上げられるとは…。

彼女が提案した事とは、簡単に言えば、

『奴隸制度とは間違っている。人はあくまで人なのだから、ちゃんと人として生きるべきだ。

だから、その為にカイトをまず自分が召し抱え、その姿を国民に見せる事で、奴隸とて一国民である事を民衆に理解させ、それと同時に奴隸達にも希望を持たせ、しかるのち、きちんとした制度を決め、順々に奴隸を開放していく』

というものだつた。

細かな制度等は考へていない。出世するカイトだけが特別…等と考えられる視点の問題もある。

しかし、自分の言葉を使い相手を説得するその力。

恐らくは上に立つものが振るう力の中で、一番大切でがなからうかと思えるそれを、その資質を見せたのだ。

その知略をもつて、ローゼスハイトの重臣たる席をもつアベルにとつては、そこが戦場であり、その戦場でれば、どんな敵にも勝つ。

それ程の意思と力を持つたアベルを説得するのは難しい。

王からも、「お前を頷かせるのは骨が折れる」と言わせた程だ。

その自分が、ほんの少しでも良しと思えるものを、たかが10歳の子供が持ってきた。

…将来が楽しみだな…

しかし、この子は知らなければならぬ。
何故奴隸がいるのか…を。

* * * * *

「成る程、確かに言つ事は」もつとも。しかし、奴隸制度をなくす事は不可能なのです

「なぜじや…？」

「第一に、奴隸制度が深く社会に浸透している事。

たとえて言うならば、貧しい民家が子供を売る事で生き延び、
それを買った奴隸商が売る。

売られた奴隸は働き手となり、それを所持する事が、財産となる事もある。

まずこれを無くすには、貧しい民家が、子供を売らずに生活していくようにしなければならない。

そして、仕事を失う奴隸商や、そもそも奴隸達にも、仕事を世話しなければならない。

さらに、今迄奴隸達がして来た仕事を、だれかがせねばならず、
また、奴隸という財産を無くすもの達にも、なんらかの保証をせね

ばならないでしょ？」

「むう…だが、それはおいおいとして…」

「そしてなにより、何故奴隸が生まれたか…と言つ事です」

「…どうこう」とじや？」

「我が國…いや、この大陸は、長く、本当に長く、戦乱というものを続けてきました。

一年として、完全なる平和がこの大陸に訪れた事はありません。必ずどこかの国と国が争つてきました。

そして、敗者には必ずその責が問われる。それには色々な形がありますが、その一つとして、負けた国は勝利した国に、簡単に言えば、金を支払わなければなりません。

しかし、必ずしも金がある訳ではない。

「この世界の奴隸、その始まりは、敗戦国が支払えなかつた対価…その代わりとして売られた、捕虜達だつたのです」

「……！」

「今現在この大陸にいるほとんどの奴隸は、元捕虜達でしょ。以前は問題も無かつた敗戦国の支払いも、度重なる出費と、一度売り払つた人権という物に、抵抗を持たなくなつてゐるといふこともあります」

「しかしそれは…自国の者達ではないのか！？」

「ええ、確かにそうです。ですが、今現在それを続けている各国の上層部は、人を、物として、駒としてしか考えていたおりません。

それに、国自体が無くなる事もよくある話ですから

「しかしそれではあまりにも…」

「それが、今のこの世界のありようです。

決して褒められた物ではない。しかし、それを正そうとすれば、根本より変えるしかない。

貴女にそれが出来ますか？」

「……うう……」

俯き、悔しそうに顔をしかめるアリシア。
だが、問題はそれだけではない。

「それに、他国の事を置き、自国でだけ……などと考へても、不可能
なのです

それは、人の感情によるもの。

人はだれしも、上へ上へと登りたがるもの。特に、一度上
下が決まつた世界に身をおけば。

だからこそ、人は己を研磨し、鍛え上げる。

ですが、人は上だけを見て生きていくものではない。

上・下とは、上があり、下がある事で初めて成立するのです。

そしてそこには、最底辺というものが必要になる

「それが…奴隸…と？」

「一般市民…それが、1番多く、そして1番大切な、國を成す要。

しかし、その要の大半が、この國での最底辺だと、それより上
に上がるのが、困難な道程だと知れたら…人はどうなりますか？」

上にいけるとわかるから努力するのであって、それが大半の人
間には出来ない事だと理解されたら…

「人は、臆病で、我儘な生き物です。

確かに、最初から奴隸等存在しなければ、比べる事など考えもしなかつたかもしれない。

上下で考えるとしても、きっと市民の中での富裕だけで考えていたでしょ。

それだけでなら、なんとかなつたかもしれない。

ですが、今はもう、はつきりと決められているのです。

奴隸がいるから、市民は底辺ではないのだと

「それが、理由か?」

「はい。

人は、己の地位が脅かされそうになると、脅かそうとするモノに對して、ひどく残酷になれる。

そして、己の地位が確かにある事によって、疑いもなく生きていくのです」

「わかった……だが……わらわは、今の話を聞いて、より、なんとかしたいと思つよくなつた」

「で、あれば、なんとかできるよう、考えてください。

それが、皇族に連なるものの使命でもあります」

アリシアは、その言葉を聞いて、はつきりと目に強い力を秘め、部屋を出ていった。

……どうやら、今度のお守りは大変らしい……

ため息をつきつつ、確かにある胸の期待を感じながら、アベルは、彼女が出ていった扉を、ただ見続けていた。

“奴隸”といつも存在価値 - 2 (後書き)

奴隸に対して深く考へるきっかけを得たアリシア。今後はどうなつていくのでしょうか…楽しみですね。

ちなみに今回アベルがアリシアをこてんぱんにした理由としては、将来に期待していたというのもあります。が、

カイトをただ欲したからじゃなく、カイトを手段として、社会を変える事を望んだからです。

単なる思いつきでも、実際にそれをする力がある。だから、よく考えなさい、裏の裏迄。

そう言いたかつたんですね。

ただの意地悪なオジサンではないのです

変わる日常変わりぬ平穏（前書き）

3000PV、ニークアクセス600突破しました！
これからも応援よろしくお願いします！

変わる日常変わりぬ平穏

あの日から、何かにつけてあの少女がまとわりついてくるよいつになつた。

…とこりより、待ち伏せをされている感が否めない。

何がいけなかつたのだろうか…といふか、何故あの少女はこりも自分の居場所がわかるのだろうか?

見張られてでもいるのだろうか…

終わる事のない思考の螺旋に呑み込まれながら、カイトは始めてあつたあの日からの事をなんとなく思い出していた。

わらわの奴隸になれ!…間違つてはいなはずだ…と言われたあの日。

偶然狩りの途中で出会い、図らずも命を助ける事となつたあの少女。

もう一度と会つ事はないだろうと思いつつ屋敷に帰れば、件の少女が訪れて、更に1年間屋敷に住まう事になるといつ。

おまけにその正体はこの国の姫だといつ。

…どこの御伽嘶だ…

おまけに何をそんなに気に入つたのか、勉強の合間に暇を見つけては小屋に姿を現す。

お付きの侍従等も最初は穢れるだのなんだの言つて小屋から遠ざけようとしていたようだが、1月経つた今ではもう、諦めたのか

なんのかよくわからないが、我関せず……といった態度を取るようになってしまった。

勉強されちゃんとしていればいいのだろうか？よくわからない。ただ一つわかつてるのは……この、背中に刺さる、ねちつこい視線から、どうにかして逃げなければならぬ……といつ事だけだった。

「あやつは今日もぐんれんかのう…あきもせずよくやる」とじゅ…」「同じ台詞をそっくりそのままお返します」

田の前でそんな事を漏らす少女の姿を生温かい田で見守りながら、マリア・ルピスは溜息をついた。

この田の前の少女…自分が仕えるべき王、アリシア・ローゼスハイト…彼女は、このガイランド家の屋敷についた次の田から、暇を見つけては、せつせとこの屋敷に飼われている奴隸の元に足を運んでいる。

最高級の手触りを持つメルク糸のような光沢を持つ豪奢な金髪に、淡雪のような白さを持つ肌。整った顔だつを持つ彼女は、ローゼスハイト皇国第2皇女として申し分のない器量を持つている。

将来はざぞかし美しくなるだらう…見た田は。

問題はこの性格…皇女といつには余りに好奇心旺盛…といつか、後先を考えない性格のおかげで、ここに来る前から何度も…そう、何度も何度も何度も煮え湯を飲まされてくる。

そして今回これだ。

皇族であるならば、確かに一度は奴隸に触れる機会を持つべきだろ。しかしこれは……

先程と寸分違わぬ姿で田の前の奴隸の姿をじ———
つと見続けるその姿は……

「あつ！姫様！また何かはじめるよひよー。」

「——ヶ月で確実に回数の増えた溜息を吐き、マリアは、そもそもこんな事の原因を作り出したきっかけを作り出した存在に目を移す。

ルビア・ルビニア……そそつかしくてドジな、何故姫様の侍従に選ばれたのかさえわからない、この見習い侍従が、あの子を逃がしさえしなければ……

* * * * *

流れるような足運び……

鋭い呼氣とともに突き出される剣先……

まるで剣舞のようなその動きを田で追いながら、私は何度めかの溜息を漏らした。

……かつこいいなあ……

あの日、姫様が飼っているルリムを逃がしてしましまい、森の中で大きな魔物に襲われた時から、彼の事が頭から離れなかつた。

その日私は、アリシア様が1年間お過ごしになられるお屋敷にむかう馬車の中で、姫様が飼っているルリムの世話を任せていた。ふわふわの尻尾を持つ、そのとても愛らしい姿をした小さな生き物は、与えた餌を口いっぱいに頬張つて、カゴの中をぐるぐると走り回つていた。

かわいいなあ……撫でたいなあ……もふもふだよね……

なんて事を考えつつ、じーっとその愛らしい生き物を見つめ続け、例のあの森に近づいたあの時。

急にルリムが足を止め、じつと窓の外を見続け始めた。

どうしたんだ？ なにがあるのかな？

普通だつたらその動きになんとも思わず……むしろ見てもいなかつたのではないかとさえ思える……いただりう。だが、ルビアは気がついてしまつた。

それが運の尽きだつたのだろう。気がついてしまつた彼女は、いつものように変わらず、樂観的に、かつ短絡的に考えてしまつた。

窓の外が見たいのかな？

そう考えた彼女は、ちょっとだけなら大丈夫だよね？と考え、ルリムを籠からだし、窓へと近付けたのだ。

一緒に乗つっていた先輩侍従が注意した時にはもう遅く、彼女の手から一旦散に駆け出した小動物は、あつという間に森の中に駆け込んすぐ姿が見えなくなつた。

いきなりの事態に混乱した彼女は、「探してきます!」と言いいきなり放ち、森へと駆け込んだ。

姫様があの子を可愛がっていたのはよく知っている。なんとかして連れ帰らなきや……

それだけの思いで森の中に分け入り、ルリムを探してどの位が経つんだろう。

一刻とも思えだし四半刻しか経つてないようにも思えた。

森の中を彷徨つていた彼女は、目の前の草叢がガサガサツと揺れる音を聞き、思わず「リリア！？」と、その子の名前を呼んでいた。

しかし、そこから現れたのは、そこらの大人よりも大きな巨体を持った、巨大なベアだつた。

なんとかそれだけ考えるも、どうやって逃げたらいいかななどを考
えられるはずもない。

どうしようどうしようと考へてゐる間にも、一步ずつ近付いてくる魔物に怯え、脚には全く力が入らない。

……私はここで死んじゃうのかな……？

不吉な考へが頭をよぎつた瞬間、今度は背後の草叢が揺れ、何
かが飛び出してきた。

また何かが出てきたーと、思わず首を竦め目を閉じる。

……怖い……怖い……誰か……

恐怖で塗りつぶされた心に、凜とした声が響く！

「退け！手を出さでない！」

反射的に目を開けた彼女が見たのは、己が仕える主。10にしかならぬ彼女が、自分の目の前に身体を晒し、大きく手を広げて自分を庇つている姿だった。

なんで！？なんで姫様がここにーー！？？

驚きも束の間、今度は更なる恐怖が襲う。

自分の代わりに姫様が死んでしまうー

それでも力の抜けた四肢は動かず、魔物はどんどん近付いてくるー

誰か……助けて……！

先程とは違う祈りが天に通じたのか、どこからともなく飛来し

た矢が魔物の身体に突き刺さる！

突然の攻撃に怒った魔物はその身体を矢が飛んできた方に向け走り出す。

その後状況についていけない思考が辛うじて見出せたのは、唐突に響く爆音と、脇から風の様に飛び出し、かの魔物に剣を突き刺し仕留めた青年の姿だった…。

その後馬車に連れ戻され、激しく叱られたあと屋敷に向け再出发し、ついた彼女達を待っていたのは、先程命を助けてくれた青年だった。

運命…そう、運命なの！

奴隸だとなんて関係ない、これは運命なのよ！

自己完結した頭のなかで幾度もつぶやき、反芻した言葉を再度つぶやきながら、彼にひたすら熱のこもった視線を向ける。

彼女の主と同じ、しかし、微妙に意味の違う
視線を、近くにある小屋に影から、ひつそりと…

変わる口音変わりぬ平穏（後書き）

ストーカーじゃん！
とかつてツツ『//』は無しの方向で。

変わる日常変わりぬ平穏 - 2 (前書き)

なんだかアクセスがぽんっと跳ね上がって、嬉しいよりも怖ろしい
気持ちが強い…

わっと今日も何処かで見てくるだらうな……

毎日の口課の鍛練を覗き見られるのは、正直あまりいい気分では無い。

と云うか、はつきりと恥ずかしいのだ。

最初の方は、隠れもせず堂々と、当たり前の様にやつてきたり、ソレはなんだ、コレはどうするのだと引つ切り無しに聞いてきた。仕方がないので、やんわりと、丁寧に、遠回しに、邪魔だから来るなと伝えてみた。

それもはじめは云わらず、「妾の事は気にせずともよー」だの、「妾はただ見ておるだけじゃ！」等と言つていたが……そつじやなかつたから言つたのに……侍従さんの方に視線で訴え続けたりどうにか理解してもらえたようで、正面で居座る事はなくなつた。……あの時は殺されるかと思つたけど……。

しかしそのおかげで、今度は何故か物陰から盗み見るよつになつてしまい、かえつて面倒な状況になつてしまつてこる。

びつしょり……こつやの事森の中……いや……もし森に中までつこてきたら……

「相変わらず人氣者だな」

こつしか手も止まり物思いに耽つていると、こつの間に来たのかフィリップが正面に立つていた。

「あ……こんにちわ、フィリップさん」

「で、どうしたんだ? ぼーっとして。」「いや……集中できなくて……」

そう言つて左手にあつた倉庫の陰に視線を移す。その途端、顔を出していた2人の顔が慌てて引っ込んだ。

……いや……バレバレだから……

はー……っと溜息をつくカイトと、それを見て笑うフイリップ。

「まあ、気にしていてもしょうがないんじゃないかな? ……それより、アベル様がお呼びだよ」

「旦那様が……?」

「ああ。いつでもいいから、執務室に顔を出して欲しい」そ�だ」「わかりました」

こんな状況じゃ鍛練にならない。先に話を聞きに行こう。カイトは小屋に戻り剣をおくと、執務室へと向かった。

「失礼します」
「ん……カイトか、早かつたな」
「ご用事があると聞いたのですが……」
「ん……まあ、座ってくれ」

そう言ってアベルはソファに身を沈めた。

慣れない状況にカイトは、身体をカチカチに固めてアベルの言葉を待つた。

「話というのはな、お前に何か褒美を出そうと思つてな」

「褒美…ですか？」

思わず首を傾げるカイト。何か褒められるような事をしただろうか？

「以前アリシア様を森で助けたといったな？あれの件だ」「しかしあれは…」

「確かに、お前達の目的としても、あの獲物を狩る事だったから、結果…としてでしかないが、それでも結果は結果、事実として、お前達に助けられた。だから、何も無しではいかんだろう」「それではガゼットの方に何かあげていただければ…」

「ガゼットには先に話した。しかし、あやつの方からもカイトになにかやつてくれという事でな、お前が来てからだいぶ楽もさせてもらっているから…と言つ事らしい」

「はあ…」

しかし、急に言われても、欲しいものなど何もない。奴隸の身分なのに、お腹いっぱいご飯を食べられ、まともな寝床にありつける。それだけで十分だった。

「流石に…この時期に解放…というのは些か問題になりそだから、それ以外で…何かないか？」

「望み…ですか…」

解放…は確かに嬉しいが、今更何処かに行く当てもない。それならばここで働いているほうがいいし…なに…か

「もし…できたら…でいいのですが…」

「ふむ…?」

「妹と・友の行方が知りたいのです」

「ほひ…」

それから、カイトは自分が奴隸となつた顛末をアベルに語つた。

村を襲つた奴隸…それから逃げた村人…追手との戦闘…。

「なるほど…それで、生き別れになつた妹の安否が知りたいと…」「はい。場所も離れていますし、3年も前の事ですから、今どこにいるかも、何をしているか…生きているかもわかりませんが…」

カイトには、今、それだけが気がかりだつた。あの日生き別れた妹…ちゃんと街に辿り着けたのか…今どこで何をしているか…。

「…わかつた。時間はかかるかもしけんが、なんとかしよう」

「…ありがとうございます!」

「あまり、期待はするなよ?」

「はい…探していただけるだけで…」

今までどうする事もできなかつた事が、なんとかなるかもしない。それだけで十分だつた。

* * * * *

「ふうむ……なるほどのう……そんな事情があつたとは……」

「姫様、流石にコレは如何なものかと……」

執務室の前、扉に身を寄せる2人の間者……ではなく、アリシアとルビアだった。

いつもよりも早く鍛練を終えた……既に時間などは調べぬくしてある……カイトがどこに向かうのかと後をつけ、執務室に入つた事から何かあつたのではと、好奇心……いや、心配になつて話を聞いていたのだった。

「そんな理由で奴隸になつっていたとは……しかし、妹か……」

父に頼んで探しでもらおうか等と考えていると、どうやらカイトが出て来るらしい。慌てて隣で泣いている……カイトの話を聞いて感極まつたのか……ルビアを引っ張つてなんとか隠れねば……と、慌てて去つて行くアリシア。

その後ろを追いながら、どこでどう育て方を間違えたのだろうか……と、本氣で詫み始めるマリアだった。

変わる口算変わりぬ平穏・2（後書き）

はい、苦労が耐えませんね、マリアは。
ルビアの天然ぶりがまたなんとも足を引つ張ります。

次回から少し加速していきます。

驚くモノ（前書き）

微妙にランキングにひっかかっていたのですね、理解出来ました。

その日カイトはいつものように狩りに出かけていた。

流石に狩りの日では後ろをついてくる事もないようで、数少ない息抜きの日になっていた。

今日はガゼットが何か用事があるとかで1人で来ている。どうもこの間森に来た時に、怪しい気配がした…という事で、街に話を聞きに行っているらしい。

しかし、1人で狩りに出る事も初めてではなく…というか、最近では1人で狩りに出るほうが多くなっていた。

また何か適当な口実でも作って遊びに出かけたんじゃないか?なんて事を考えつつ、カイトは森の奥を目指していた。

今日の目的は、前回来た時に仕掛けていた罠の確認と、矢羽用に使える大きな羽根を持つ、バーツという生き物だ。

バーツはあまり姿を見かけない生き物だったが、以前来た時にファームを見つけたので、そこへ行ってみるつもりだった。

ファームとは、人でいう部落や村と言った感じで、單一種で作られた集落…といった感じだ。

必ずファームが出来ている…という訳でもなく、モンスターや一定以上の知恵を持つ動物でなら珍しくもないが、バーツがファームを作っている事は珍しく、狙い目でもあった。

先ずはファームの方にいってから…かな。

着いたファームでは、今もバーツの群れが羽根を休めるところだった。おそらくその数30以上…この森に生息するほぼ全てが集まっているんじゃないかという位の数だ。

…おかしいな…本来バーツは渡る習性も無いはずだ。卵を産む時期でもないし…何があった…?

ちょっとした異常事態に頭を捻らせるも、ここで1人で悩んでいても仕方がない。今は獲物をとるのが先決。かえってガゼットに相談しよ!…。

そう結論付けると、カイトは肩に背負っていた弓をおろし、静かに近寄っていった…。

目標は…3羽…いくぞ…!

手の弓を握りしめ、背負っていた矢筒から矢を引き抜き、限界まで引き絞った弦から矢を撃ち出した!

* * * * *

街に来ていたガゼットは、いつも顔馴染みの店に顔を出しつては、世間話するとともに情報を集めていた。

「よーうガゼットー久し振りだな。今日はまじつした?」「おひへ、グラツツ。ちょっと武器の整備と、調達にな」

「」はガイラムの街で一番腕のいい鍛治師のいる工房…といつても二つしかないが。それでも腕は確かだ。」はよく冒険者も利用しており、出る武器などで何があつたかもおおよそわかる。

「ほー…お前もか」

「ん? 他にも来てる人間がいるのか?」

「こらへんのモンスターは以前、粗方始末したはずだ、一度掃除したらそう簡単には再発生はしないはずだ。」

「ああ、なんでも、」最近近くの街道でよくモンスターが出るらしい。といつても、あまり強いヤツはないようだが。それでも危険には違いないから…と、駆除の依頼が多くなつているらしい」「それは…いつ頃からだ?」

「ん…確か…一月前位…だったか? 詳しい事が知りたけりや、ギルドに行つてみたらどうだ?」

「ギルド…か…」

「まあ、お前が好きじゃないつてのもわかるが、それが手つ取り早いだろ。・・・気になるんだろ?」

「そう…だな…」

「」何年も近づいていない場所だったが、仕方がない。整備をしている間に顔を出すとするか…。

* * * * *

結果は5羽…数が数とは言え、単独での狩りならば上場の結果だった。

本来ならば2射目辺りで大体のものが逃げ出す筈だったのが、今回に限っては何故か動きが鈍く、遠くへと逃げないものを優先的に撃ち落とした結果だった。

それでも流石に5羽も落とせば踏ん切りがついたのか、全てのバーツが去っていったが…。

しかし…何かがおかしい…。

森 자체が奇妙な静けさで包まれていて、普段ならばそこらを駆け回つて入る小動物の姿もない。いつたい何が…。

そんな事を考えつつ、罠の方へと足を運ぶカイト。見回り次第、すぐに戻ろう…などと考え、めぐる事半刻程。罠の一つでガサガサと揺れる音がしていた。

‥あたりかな？

などと考え歩み寄ると、そこにかかっていたのは、一匹のリルムだった。

珍しいな。こんなところでリルムを見かけるなんて。

本来リルムはもつと南の方で生息している筈だ。この辺りではまず見ないし、罠にかかるような事もないはずなんだが‥。

などと考えつつ、罠を外してやるカイト。正直リルムを食べる気にもなれず、きつとどこかの家から逃げ出しが住み着いたんだろう‥戻つてから薬を塗つてやろう‥。

罠を外し、丁寧に布を巻いて、怪我をしないようにバックパックへと入れたその時、と遠くの茂みがガサガサと揺れ始めた。

‥獲物か‥？

バックパックを下ろし、身構えた瞬間、その茂みから何かが飛び出して來た！

咄嗟に回避したカイトが見たモノは、自分の身長の半分程の大きさの、縁がかつた体表をした、気味の悪い小人のようなモノだった。

片手にナイフの様なものを持ち飛び出して来たソレは、ゴツゴツとした顔に醜悪な笑みを浮かべ、カイトのバックパックを手にしている。

慌てて詰め寄り、腰の剣を引き抜き斬りかかるカイト。出来た時は遅れをとつたが、正面にいるならば別だ。

数歩の距離を一呼吸で詰め寄り、右手の剣を一閃！目の前のイキモノの首を斬り落とした！

崩れ落ちる身体からバックパックを取り返し、その身体を見やる。

…「」の森でこんなイキモノを見た事はない…まさか…モンスター…？

不吉な予感に襲われたカイト。だが次の瞬間、このモンスターらしきものが現れた茂みから、同じ様な格好をしたイキモノが4体、飛びかかって来た！

…ツー？まさか、血の匂いに…ツー？

急な展開に驚きを隠せず、しかしこのままでいいないと、バックパックを肩に担ぎ、なんとか退路を確保するために、カイト

はそのモンスター達へと剣を向けた。

降りかかる猛威

最近モンスターが大量発生している。どうやら発生源はあの森らしい。以前駆逐した巣に新たな種が住み着き繁殖した様だ。

ギルドに赴き聞いた話を纏めると、こうこうつ事だった。

確か今日は、カイトが一人で狩りに出でているはずだ。あいつはまだモンスターとの交戦経験が無いし、巣の場所を教えた事もない。まかり間違つてあの場所に近づいてしまつたら…。

慌てて屋敷まで戻り、小山で駆けつけると、丁度森の中からカイトが出てくるところだつた。

着ていた服はボロボロになり、ところどころ血が滲んでいる。しかし、疲れてはいるものの、致命傷という訳ではないようだ。それだけ理解したところで、ガゼットは安堵の息を漏らした。

「あ…ガゼットさん…」

どうやらヒーロー気がついたらしい。

「無事だつたみてえだな。よかつた」

「はい…森の中で、緑色の小人のようなものに襲われて…」

緑の小人…ゴブリンだろうか…？以前駆逐したモンスター

も「ゴブリンだった。

「何匹いた?」

「罠をしかけたあたりに…最初は1匹だけだったんですが、どんどん増えてきて、最後は20匹位に…」

まず間違いないだろう。あいつの一一番厄介なところは、その繁殖力と、数で押し包んでくる所だ。

「よく無事だつたな」

「とにかく隙をみて脱出しようただけ考えていたので…」

「そうか…とりあえず、小屋で休んでいる。俺はアベル様と話をしつづける」

そう言つと、俺は執務室へと向かつた。…しかし、思つたよりも数が多いな…ここまで増えてるとは…急け過ぎたか…。

己の失態に舌打ちをしつつ、しかし、カイトの成長にも驚いていた。

並の大人ならば、20匹のゴブリンに囮まれば、逃げ出すのも容易ではない。手練れの冒険者でも1人では苦労する。

…2年の間にそれだけ成長したつて事か…

弟子とも言える存在の成長を嬉しく思いながら、足早に屋敷へと向かうアベルだつた。

* * * * *

小屋に戻り、自身とリルムの治療を終えたカイトは、そのまま横になつていた。

あのモンスター…いつからこの森にいたんだるつか…。

「最近ではあまり無かつた『戦闘』とも呼べる行為に、カイトは身体を震わせていた。それは、あのモンスターだけによる恐怖ではない。3年前の、あの日の恐怖を思い出していたからだつた。

自分の実力は、あの時よりも上がつただろう。だが、あの時よりも多い数、そして人間とは違う存在。それが、こも屋敷や近隣の街を襲つ…。

そう考えただけで、身体が震えた。

簡単ではないだろ。だが…あのモンスター達を、根絶やしにしなければならない。

心の中で覚悟を決めたカイトは、倉庫の奥にあつた防具類などを点検する事にした。きっとガゼットは行くだろう。ならば、自分もそれについて行く。そう、固く心に決めて。

主人に事情を話し、これから行動を相談し終えたガゼットは、小屋にいるだらうカイトをどうするか、決めかねていた。

近隣の街の脅威にもなる。森や周辺には、街で依頼をだして冒険者に駆逐させ、巣には自分一人で殲滅する予定だった。

おそらくこの分では、巣の中には100匹以上…そして、周辺にもそれなりの数が出ているだらう。以前よりも数を増したモンスター相手になれば、足でまといは要らない。

一体一体の脅威はそれ程でもない。困まれないようになさえ氣をつけさえすれば、どうとでもなる相手だった。

だが…カイトは…さうとついて来ると言つだらうな…。

ある意味実力でいえば問題はないだらうが、集団相手の戦闘ともなれば勝手は違つてくる。今更教えても付け焼刃であれば…。

そういうしていふうちに小屋にたどり着いたガゼットは、

扉を開けるなり田に入つて来た光景に驚きを隠せなかつた。

そこにあつたのは、倉庫の奥にしまつてあつた筈の、自分の装備一式と、おそらく自分で作ったであるひつ装備を身につける、カイトの姿だつた。

綺麗になめした革を幾重にも重ね合わせたであらう、身体の急所を覆うレザーアーマーを身につけたカイトは、ガゼットの姿を見るなり、「俺も行きますよ」と言わんばかりの視線を投げつけて来た。

…これは…置いてはいけないな…。

苦笑と共に、覚悟を決めたガゼットはカイトに、対モンスター戦の心得を教えていった。

降りかかる猛威（後書き）

いよいよまともな戦闘シーンとなります。

これまでぬちゅうじづけしか出て来ませんでしたしね。

グロ系好きでない方は、飛ばすほうがいいかもしれませんが、

仄暗い廃坑の奥で

「よし、それじゃあもう一度確認するぞ!」

ガゼットの戦闘講座が終わり、今は巣があるであろう廃坑の前に来ていた。

「まず、基本は狭い通路で、挟まれない様に気をつけながら、出来るだけ少ない数の敵と戦う事。特に今回のように、繁殖力が高いモンスター や、連携がうまい相手には有効だな」

「はい」

内容自体は出てくる前に聞いていたので、新しく覚える事はない。しつかりと頭の中で思い出せている。

「それから、戦っている最中、疲労が溜まつたり、大きな怪我をして治療がしたかったりする時は、大声で『スイッチ!』と叫ぶ。これが出来るのと出来ないとでは大違いだぞ。無理をせず、余裕を持つて事に当たる事」

「はい」

狭い通路や単体の敵と戦う時等は、基本的に正面の人間しか戦えない。だからこそそのスイッチだ。

「死んでしまえば元も子もない。どうやって倒すかじゃなく、どうすれば生き残れるかを考える。いいな?」

「はい!」

「…よし…いくぞ!」

「ギャッ、ギャッ、ギャッ、ギャッ、」

「…チ…ツ…キリがねえな…」

肩に担いだロングソードを斜めに振り下ろし、バフロンの一匹を両断しながら、ガゼットは苛立ちを隠せずにいた。

まだ、廃坑に入つてそれ程進んでいる訳でもないのにこの数…既に30は既に超えている。これは、100どころではないかもしねれない。

参つたな…「いや…どうせひつて数を減らす…？」

そんな事を考えつつも、身体は止まる事は無い。既に辺りは屍の山となつてゐる。

チマチマやるのままだと口わんが、仕方ない…か。

しかし、イラつゝものは仕方ない。と言わんばかりに、右手のロングソードを右に、左に、閃かせる」と、一つ、また一つと屍が増えていく。濃い血の匂いが、まるで「プリンを誘つ媚薬の様に辺りに充満していた。

…凄いな…。

後ろから見ているだけで、その凄さがわかる。

まるで無造作に振っているかの様に見えるが、きちんと計算され、確実に致命傷になる様に剣を振るつていて。

それは舞の様に美しいわけではない。しかし、剣を操る者の一つの到達点とも言える姿だった。

…俺もまだまだだな…

自惚れていた訳では無い。しかし、それなりに実力はついた…と思っていた自分が、まだまだ足元にも及ばない事を、肌で実感させられていた。

…負けていられないっ！

「スイッチ！」

ガゼットの声に反射的に飛び出し、モンスターの群れの眼前へ飛び出していく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

右払い…右袈裟…左逆袈裟…身体を返し体重を載せた右払い…

一時も止まる事のなく続く剣閃の嵐に、ゴブリン達がなす術もなく次々と倒れしていく。

ガゼットとカイトのコンビは、大量に現れるゴブリンの群れに怯む事なく立ち向かい、その殆どを斃していった。

それは本来ならば恐れを知らず、只々殺戮のみを本能に宿すモンスター達にさえ恐怖を覚えさせる程のものだった。

今まで尽きる事なく湧いて出て来たゴブリンの姿も無く、気がつけばそれまでとは少し違つ、ひらけた広場のような場所に出ていた。

…嫌な予感がしやがる…ここに来るまでのゴブリンの数といい…この場所…前に来た時は無かつた筈だ…。

油断無く辺りを伺っていたガゼットは、奥にあつた通路から、何か得体の知れないモノが出てくる気配に気がついた。

不気味な唸り声と共に姿を表したソレは、

黒い毛皮に全身を覆われた獣、プラックウルフと、今までのコブリ
ンとは遙かに違う、軽く見上げるような体躯を持つた…恐らくこの
巣の主だろう…赤い体表をもつたオーガの姿だつた！

…ツ！？何故こんな所に、オーガやブラックウルフが！？

舌打ちをしつつ油断無く辺りの気配を伺うガゼット。だが、それ以上のモンスターの存在は無いようだ。しかしそれでも…この2体を同時に相手するのは、今の状況では無謀でしかなかつた。

アリス... おはようございます。

この情報はギルドに届ける必要がある。何故、この大陸中央部… それも、迷宮やダンジョンでもない場所に、オーガやブラックウルフがいるのか… それは、ギルドの総力をあげてでも調べる必要のある事柄だ。

…しかし…簡単には帰らせてくれそうにねえな…」つや…。

既に敵は臨戦体制を整えており、今すぐにでも飛びかかって来そうだった。せめてカイトだけでも逃がさなきゃならんか？

「逃げ川ウドシテも無駄ダ。お前達ハ多くノ同胞を殺シ過ケタ」

…！…喋れるのか！？」のオーガは！？

ガゼットは、モンスターが発した言葉に戦慄を覚えていた。言葉を発する事が出来るモンスターは、西の外れの小大陸にしかいない筈。先程からのあり得ない事態の連續に、ガゼットの思考は混乱の極みに達していた。

どひづる…どひづるどひづる…！？

しかし、そんなガゼットを落ち着かせる暇を、モンスターが与える筈も無く、「やレ」という一言と共に、ブラックウルフがいかかって來た！

ウルフと血の名に恥じぬ、圧倒的な速度で襲いかかって來たソレは、一瞬の躊躇も無く隙が出来たガゼットの首筋へと飛びかかった！

風の様に飛びかかって來るブラックウルフを呆然と…しかし、なんとか反撃しようと身體が勝手に動くのを、まるで他人事の様に

考えながら、まるでスローモーションになつたかの様な視界で敵の姿を見つめる。

間に合わない…

長年の戦士としての勘が、その先の自分の姿を予見の様に映し出す。

なんとか…カイトだけでも…

しかし、次の瞬間。

唐突に横合いから飛び出して来た人影が、飛びかかつて来たウルフに剣一閃！

その剣線は、ブラックウルフの身体に吸い込まれるように奔つていき、獣の身体を真横に切り裂いていた！

その衝撃から吹き飛ばされ、地に転がった身体に尚も力を入れ、立ち上がる。とするブラックウルフに、そのまま駆け寄り頭蓋へと垂直に剣を振り下ろすカイト。

その剣は見事にブラックウルフの頭を二つに両断し、獣の息を止めていた。

「大丈夫ですか！？ ガゼットさん！…」

かけられた言葉にふと我に帰り、こちらを見やるカイトの姿を確かめ、ふつ…と自嘲的に唇を歪める。

「まさかお前に助けられるとはな…！ 随分腕を上げやがった」

素直に口をついた言葉は、ガゼットの本心からの言葉だつた。手馴れた冒険者でも簡単に餌食にするブラックウルフを、一頭だけ、横合いからの隙をついたとしても、いつもあっさり倒すとは…俺も歳かね…。

「ふム、あいツをこうも簡単一退けルトは。中々ノ腕をモツよづだな」

「てめえに褒められてもカイトは嬉しくないだろ？…カイト！…氣合入れろよ…」こいつは今までのとはちいと違うぜ…！」

尚も不敵に呟くオーガに視線を向け、 気概を取り戻したガゼットは、 猛然と飛びかかっていった！

仄暗い廃坑の奥で（後書き）

ダンジョン、迷宮やその他の違いは後日作中にて説明しますでは
い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6072y/>

蒼穹の竜騎士《ドラグナイト》

2011年11月27日18時51分発行